

## 地政学上のリスク（2014年8月11日）

正直、地政学上のリスクを本気で感じたことは1度しかない。2001年9月11日、東京時間夜のことだ。酔っぱらって帰ってきてテレビで見た光景に度肝を抜かれた。飛行機が貿易センタービルに突き刺さって煙を吐いている。NYに電話をかけた。相手も何が何だかよくわからないと言っていた。そこから先のことは気が動転していたのかいまだによく思い出せない。2機目が激突し、ほどなくしてビルが崩壊した。映像は見なかったが、そのほかにもペンタゴンが狙われ全米がパニックに陥った。何が起きたかは憶えているが、あの時自分が何をしたか、どういう投資行動を決断できたかと言うと、これがよくわからないのだ。

“同時多発テロ”という名前がついたのはずいぶん後の事である。金融市場は完全にマヒした。米国の取引所は閉鎖され、東京では顧客の解約対応に追われた。ただこの時米国大手投資銀行は、“株は無理だが債券なら流動性確保のために値段を出す”、と“ガッツ”を見せた。貿易センタービルに入っていたキャンターやリーマン・ブラザーズには多くの犠牲者が出た。友人の米国人為替トレーダーはしばらくの間スキンヘッドにしていた。

そこからアフガン派兵、イラク戦争へと続く米国の混迷が始まり、この闇は結局ビン・ラディンが殺害される2011年5月まで続いた。リーマン・ショック後の米国株の本格的な上昇はここから始まる。

同時多発テロ以外はたいしたことがなかった、というのは最初に経験した湾岸戦争（1990年8月～91年2月）によるところが大きい。1991年1月17日朝、ロイター、テレレートが空爆の開始を告げた。東京市場寄り付き前である。私は野村投信（現野村アセット）でファンド・マネジャーをしていた。この世の終わりかと最初は身構えた。しかしその後CNNから流れてきた映像は、我々の想像をはるかに超えるものだった。

<https://www.youtube.com/watch?v=eFjsa0RwhOY>

まるで花火でも打ち上げているのかと思ったが、それがバグダッドから打ち上げるイラク軍の地对空ミサイルであり、それが一つとして多国籍軍を打ち落とすことが出来ずに雨あられのように空爆が続けられている、と亡くなった江畑謙介しが解説していたことを思い出す。私は地政学上のリスクにおいては氏の分析を一番信頼していた。

この映像を見た数分後、私は電話を取り、米国債を当時動かせるありったけのお金を投じて買いまくった。戦争は短期で終結すると確信したからである。

やがて東京市場が始まり、同じように多国籍軍の圧倒的勝利で戦争は短期間で終わると見た世界中の投資家が、日本株を買って行った。この日日経平均株価は22,403円で寄り付き、22,100円までいったん売られたものの、最終的には23,447円まで買われ高値引けして

終わる。欧州でも米国でも株価は上昇し金利は低下した。

学んだことは二つある。空爆はリスクではない。ボスニア・ヘルツェゴビナもアフガンもイラクも、空爆の段階には市場の動揺は広がらなかった。しかし地上戦突入にはリスクがある。ベトナムと言う失敗例があるからだ。更にもっと大きなリスクは米国本土が狙われるケースである。これは予想不可能な展開が起こり得る。

翻って現在の地政学上のリスクを考えると、今直面する問題としてはウクライナ情勢が一番大きい。しかしこれはロシアの本性が露呈しただけの話であり今更嘆いても仕方のない話だ。ロシアもまた地上戦のリスクをアフガニスタンで嫌と言うほど学んでいるし、出来ればウクライナ人同士の争いで終わらせておきたいところであろう。制裁がどこまでもエスカレートしてゆくとは思えない。

無視するわけにはいかないリスクであるが、かといって今の段階で株を売るとか、債券を買うとか（あるいは売るとか）、金を買うとかいった投資行動に結びつけるまでには至らない。